風雅和歌集上

九曜文庫

風雅和歌集序

夫和哥者氣象充塞乾坤意想花園
宇宙渾沌未割其理自存人物既生其
義遂著矣風雲草木之趣於物感也萬彙
入雅思之端思慮哀樂之發於景趣也
一心為源緣之外吟詠性情卷舒政教雖
彼津之什者天子之德也聖人之風始被
一朝淺香山之辭者采女戲也賢者之
絶已及四方傳播吾朝之元由自諧二首
之修辭在乎而世逐醲醨人趣浮華不
知和哥之實義綺以為好色之媒近代之
弊玉於益巧益密惟以綺靡欺人為事
竊古語假艶詞修飾而成之運騁平大華
式以鄙俚庸俗之語未速拙意不知風體
不足並以不足觀者也淳風質朴情理之
本孰不據此而睛於態度而猥取之者
形迹作之意采於巧辭華靡之奏何以
加而幸於興味而為好之者其雅正也
体文風采微高古雖無含蓄之情句
法欲精微易入細碎之其勤也則成惡

張之氣媛艶急有懦弱之病浄于斯哉
不達毛挙乃如文質乎修意句共於者
宜忘言得旨豈假筆舌盡乎物為謂之
不達其本源者多溺彼末流要只深
志於古風不可假歩於邪徑者耶三代集
以後得于之意者僅不過數輩于茲式有鼎
堂不入室況頃年以来我欲息之餘
為救此類風迴還元之故事適合風
雅者鳩集而成編天下云可矣之云
故撰集編録自上古至當世集而録之

令曰風雅和哥集茲推握圓自推運
救脱蹤不為神化於雖有挟漢韻既為
得三隔多間雕刻後煙氣早双春為遶
花山之風流刑不用秋葉空於草野之
露流切已與廣續方悲雖斤善而悲筆
備一物之共不故嘆此道久廢俗流不
分涇渭不以有此撰挑編採花桐蘂藻者
壯一体之觀当欲筆正風雅刊考遺子
哉之義者也于時貞和二年十一月九日
概立藝葉同記大緫云尒

やまとうたはあめつちいまたわかれさる
よりそのことわりおのつからあり人のし
わささたまりてのちこのみちつねにあら
はれしより世となり時をそへて雲風につけ
てこころはしをのふることひろくはひらまへ
よむるふ花鳥をとりてあそひてならひとう
こゝすこしと葉かもろふしてむすふかし海とに
人のこと縁と身にしるへし下をとしへ上をと
いさむむねふかくちまつりしよりとなる難波
津の君よそへしうたはあめのしたに風とけ

あさか山のことはあれまさりしよりこのみ
みのこころをやはらく風まかせと葉はなさ
かなるふまへれとも周雅のなかきみち
まひとしるへしかのゆへに代をへしきしまの
見ちとをこれともて結ひすゝめふみぬお訓
のこころよもうすふたこみのことやしなひと世こそ
まみちおとろへゆきしよりてくにとこ
のむ中あちとなりて國とをさむるわさそし
らすいんやまとうたれ世となりてよりのこ
とわさまそれはしとすくなくいろつそりれ

かくなりにけれはむかしへよりさまつりすへきた
くもなからんやせとむねとしていにしへの風に
のこらすあつめいふかれしと葉をぬきとるに
これらはさとはくろひなしてさしに花の
りしにまさるはなさ心をはなさとすとのことにて
むなひたるすくあえしことの葉にくれ
りひえてこゝろりとひあひてにほし
さんもなとなつしと葉にふりしへのみちなり
あとにこれをとるもとへとももとはまふ
まよひてこあてまふりてもれつちやしき

まさことなりたむ数ならぬ身なてなつて
ろ優なつけつにつけすりしなに思ひを深
あまくみさりにこのまつこれはひとつりを
これあへしゆまもこれもたゝひにゆよ
ひくいかへのかにちよにおくすけつゝひさ
まゝこあつらんとすまにうれてころそう
すうと葉こまやらぬまゝはそのけまいやし
えんなつはあつれならつきさいあめけりう
らすまてつくあまとをいふりそのことろを
そけきこものの葉をそのへけくしかゝて

むまをえてく月つくさけりなむおかしくそ
いろも風くりの多まこころはしとそめ和
奇れうしるゝふりはとくろくてなりれかゝ
のよふ多かすしてなのくなりひの清る
ひりとみられくたまへとつねしと氣れ
花まれひとそへてみしさとなりとのかん
れりひおつらうよゆしのこころとえく
奇乃たなしもろへはなくとうかすもく
くなんありけるなふみの布しみのしあ
こそろくかさいとのむきしりのこゝ

らそひおひくみえりうしくなりまにけり
みまうこれといくまはれんやそてふるき
まつことをてひくしなかんちとまなく
なのつしうれさうひよつりぬへしそも
くむうしはおまいもつさとうけてり
しみのうちしけきことわさふかまのされ
まくしてとおもいかちまのあつたこや志ん
山しつなつすまひとしあなつしなくとあ
めれしぬよろのさつりしとさては
とひおきき衆ふいあるいと肉なりしは

をさめしむ八乃徳にそなへしむるもこれ
さかりて聖のひしりこまのもとりつかさす
よりのうみおこりし流も志けくなりて
ふるきことはすゝろに摘あつめたまへれ
けまへハまこと乃みちのみちれたと絶へにしも乃
ことわさのをあらためたすけしくこれみなより
て元久乃むかしのあとをうつしてあつむる
ことのはしきしまにしめふかきことを
あふことえしひおつめてたえしまれと
せりなつきて風雅和歌集といふことは

ゑよそみなさけよもろまてめのまへ乃
興とのこゝろふかくすゝしき風
いにしへ乃たましゐの世よえらしての
まとひをもくえんとあめなり時よ貞和
二年十一月九日になん志るしをハりぬる
このこひうくえしひをきさねまへハ濱千とり
ひかしこさおとをとめつら乃玉も見るを
はかりとのこしてはしいやうくまたね
世代にふかき流くへ志さし海乃ふかし
きみちとあつ孫んのちれともうしまよ

いぬゐへとあらしはしめつも

風雅和歌集巻第一

春歌上

春たつ心をよみ侍る

前大納言為兼

足引の山の白雪けぬかうへに春てふけふは霞たなひく

文治六年正月女御入内の屏風に小朝拝

皇太后宮大夫俊成

九重や玉しく庭に紫の袖をつらぬる千代のはつ春

元日宴を

後法性寺入道前関白太政大臣

もゝしきや春の光とみゆるかなかりをつらぬる雲の上人

建仁元年大神宮へたてまつられける百首歌の中に

後鳥羽院御歌

朝日さすみもすそ川の春の空のとかなるへき世の気色

早春をよみ給ける

後西園寺入道前太政大臣

山のはを出る朝日のかすむより春の光は世にみちにけり

初春の心をよませ給ける

伏見院御歌

霞たち氷もとけぬ天地の心も春をおしてうくれは

春の歌の中に

院御製

我心春にむかへるかすみの色もゆきはそなはる
それなし心と　進子内親王

のとかなる霞の空の夕くれに家そ春風そ給
をしらす　前中納言定家

なかとかくもそとゆふ山のはにとしみるむかしこそ月夜

天暦の御時大さいのゆふそこれかは

子日して言よしと侍りけり

大中臣能宣朝臣

みな人のすきとれもぬる松のは葉数をとそかそふ千とせ

子日を　中務

野への生しまゝにさしへつまかは河をさねぬ松の末より春をけし
万葉とよめり　小弁

老ふ色移春ともみえすみへの野への松に宮ゐ摘え
源順

めもあらは宮まも春く野へふる野への若菜を
をしらす　藤原基俊

春山のまかれのへこのきとて沢宮そまる
源俊頼朝臣

春日の宮村さえぬへてなかつめ若菜なかぬらん

住吉社によみてたてまつりける百首哥の中に

若菜を　　　　皇太后宮大夫俊成

いさやこらわかなつみてんねせりおふるあさゝはをのは里とをくとも

　　　　崇徳院御製

春くれは雪けの沢に袖たれてまたうらわかきわかなをそつむと（そ摘）

　　　　前大納言為家

春日山のとけさ春風ふきさそふ八十うち人もわかな摘らんし

百首哥奉りし中に春哥

　　　　民部卿為定

わかなつむ里人の跡なかりせは野へのけしきにはるはしらまし

霞を　　　　太上天皇

天の原おほふ霞のときはなるこゝろにとりの春やしるらん

　　　　後鳥羽院御哥

まつくらきほとにけてみ渡せはなにといふやへの霞をきり

仲を猶や志らひのくれ春もさし霞ふかまるらふわかれ松原

　　　　九条左大臣女

峰のゝ霞もちらよそのめさそて春日こりまる春もやは

前大納言為兼家にて歌合し侍けるに春

霞を

　　　　前大納言為相

出る日のよそのひかりに成はへて松原ちてこれ山そかすめる

承久元年内裏百番歌合に野径霞と
いふことを　順徳院御製

夕附日さすや末野にゆく人のすけのを笠に春風そ吹

春御哥の中に
伏見院御哥

夕暮の霞のすゑに飛鳥のつはさも春の色のみえける

題しらす
前大納言為兼

しつかなる入日のさかりにかすむ里あをすめる山の奥の影

従二位為子

春ふかき霞の空の夕附日くれてまよふすさき山風

宝治二年後嵯峨院に百首の歌たてまつり
ける時山霞と　常盤井入道太政大臣

なかめこしをちの山もしらすかすみあへは春さへあさき

後京極摂政太政大臣に侍る時家に歌合
し侍けるに曙霞といふことを
前中納言定家

まきの山とふて月をかくすと霞よりつゝ峰の横雲

春哥の中に
柿本人麿

こえてふまきりく山に春されは木葉しのきて霞たなひく

紀貫之

みよしのゝ吉野乃山の春霞にもとかくて猶雪そふる

春雪とよませ給ける

後伏見院御哥

たましゝと嵐のほとにしら雲ふかくすゑの梅か枝の一村

後京極摂政太政大臣に仕ける時家に六百番

哥合し侍りしに餘寒乃心をよめる

前中納言定家

霞あへす猶ふる雪に空とちて春物ふかき埋火のもと

おなし哥合に春氷

従二位家隆

春風にしたゆく浪の数みえて残るともなき薄氷

百首哥乃中に

順徳院御哥

ちくま川春ゆく水はすみにけり消ていくかの峯の白雪

千五百番哥合に春哥

前大納言忠良

花や雪霞や烟しらぬ梅のかをるねよさゆる春風

春哥あまたよませ給ける中に暮春を

伏見院御哥

春とふと猶風まゝにふる雪のちる日はいとゝ寒けし

餘寒の心を

永福門院

あさ風はそともの竹に吹かはりて山の霞も春めきにけり

春雪と　圓光院入道前関白太政大臣

消さゆる庭には色もみえねとも草木にふかき春の淡雪

土御門院御哥

春もまたあさる雉子のなみえてむかしの野への白雪

鶯しらす　安嘉門院四条

日影さす山のはそこに聲の春来にけりなほ消えて藪

早春柳　伏見院御哥

柳しもふとふとよまた世振けり

春風は色は柳のいとにみえそめてまたむすほれ宿そさむけき

鶯しらす　後伏見院御哥

鶯の春さけまてそよそにむかしはなかき春の霞よ

人麿

山さとに鶯鳴てうらわかき春とも人は思ひしらなん

よみ人しらす

うらわかき春のはしめは篠のはにおくしら雪に鶯も

鶯のねをそくなくとてよみ

道命法師

つれ/\と今日まてのふる春の日に鶯のこゑそまたせぬ

源信明朝臣

鶯と

鶯の鳴ねをきけは山ふかみ我よりさきに春はきにけり

土御門院御製

霞にむせふ山の鶯出やらて ぬれにしの春にまよふ家

春乃うたよみ侍けり

正三位知家

今乃為そきつゝ山のかすみ見れは忘れぬやとる春の鶯

前大納言為兼

鶯の忘れぬものとに鳴るてかはむ日影は今も世に

嚴安門院

けくしと鳴きさき春日を鶯のおもしねそのこえきくかな

題しらす

皇太后宮大夫俊成

我そのと宿とふ志めよ鶯の梅のさとの春乃雲よつきて

よみ人しらす

霰の音りきゝにかゝは鶯なきさけ春にあらし

梅花咲きなから人よ知らせはとりくもとおし鶯の声

梅もちゝまくに我その竹のはやしに鶯なくも

嘉元二年坂宮の院に百首の歌奉りける時

鶯を

後西園寺入道前太政大臣

咲竹のはやさのゝ園ちかき鶯をも鳴に鶯の鳴く

文保三年名てまつりける百首の哥に

前大納言為世

ゆふ暮はそのゝねくらを出やらて竹のはやしに鶯そ鳴

伏見院よりめされける五十首歌の中に

従一位教良女

のとかなる霞の空に春みえてなひく柳に鶯の鳴

春の歌の中に　後京極摂政前太政大臣

春の色はもとよりいつる籬よりこほれて匂ふ梅か香そする

前参議経盛家の歌合に鶯を

道因法師

花みてそ身にしむ梅は鶯のあかぬ契の匂ひなりけり

春歌とて　藤原為基卿

梅か香ににほふ春への朝戸出にしらさりし鶯の声

梅とゝもにまつ聞けり

伏見院御歌

花のへや竹ふく風のさむけさに春をまたせる梅かえそすむ

延長十六年亭子院の屏風に人の家に女とも

の梅の花あるかたの山のこなたに鶯をみる

所

貫之

梅もさくとしらすやあかん春の山にともまつ鶯の聞ゆらん

題しらす

中納言家持

宿のえとうかひてはきゝ梅も今さらかとも人をとふ

梅を　永福門院

山もとの里のつゞきに咲梅のひとへに世ゝの春に成ぬる

後宇多院御製

さゆるきや軒風寒き袖のうへに雪まぜにちる梅の初花

百首歌奉りし小春哥　権大納言公蔭

咲そめて春ぞしるしと待ちまし窓ちかくより匂ふ梅かえ

早春梅といふことを　今上御製

かりまで宿ときゝてよみ山へも遠き里には梅咲にけり

遠村梅を　厳安門院

一村の霞のそこに匂ひゆく梅の梢は花なるころ

春哥の中に　皇太后宮大夫俊成

梅のえにまつ咲かむそて春風の色と身にしめそむる袖哉

清慎公家屏風に　貫之

春ゆきてはなと匂ひし梅もめでしみやゝ人のおかれん

梅を　中務卿具平親王

梅花匂ひをとめて折つるに色さへ袖にうつりぬる哉

従一位倫子春日にまうでてかへり侍りけるに
源兼資梅花を折て車に入侍るとて
手ことにをりてそこなる梅も拾ひし
ましとりふもとにてやりければ
赤染衛門
いにしへの花のかをもをりける人の心をそ見る
紅梅をよめる
俊頼朝臣
くれなゐの梅かえに鳴鶯は声の色さへことにそありける
題しらす
前大僧正慈鎮
咲ぬれは大方人もとふちまて梅より春の匂ひそめけれ

春の歌の中に　後鳥羽院御哥
百千鳥さへつる春のあさみとり野への霞に匂ふ梅かえ
題しらす
人丸
いもかためほつえの梅を手折とてしつえの露にぬれにけるかも
よみ人しらす
人ことに折かさしつゝあそへともやめつらしき梅の花かも
宝治百首哥の中に梅薫風といふことを
前大納言為家
よそめとも人まつ梅は梅も風にあまねく匂ひきぬなり
春哥とてよめる

祝部成仲

梅花匂ふかきりは山川のしたくもなかつしらぬ

夜梅を　　中務

匂ふ香を志るらむ人は梅もかくぬのに山におりゐて

題しらす　　前中納言定家

雲路行雁の羽風も匂ふらん梅咲く山の有明の空

前大納言為世　兼イ

梅か香は枕にみちて鶯の声より明くる窓のしのゝめ

百首歌奉りし時春の歌

進子内親王

窓あけて月の影しく手枕に梅かほれる軒の春風

梅をよみ侍ける

前大納言為氏

軒の梅は手枕ちかく匂ふ也窓のひまもる夜半の嵐に

題しらす

院御製

春の里霞にこもる梅柳たか里遠く成ゆく雲

永福門院内侍

雨の夜の風は枝に吹入てこもれる匂ふ軒の梅か枝

春歌の中に

太上天皇

わか宿のなかにかへりて梅も桜もゆるしてちらんとすらん

題しらず　　和泉式部

見るまゝにしつえの梅もちりはてぬさもまちとほにさく桜哉

風雅和歌集巻第二

春歌中

百首御歌の中に　　院御歌

みとりこき霞の下の山本にうすき柳の色そこもれる

題しらず　　権大納言公蔭

春雨のめくむ柳の浅みとり何ころもちる色まさるらむ

五十首御歌の中に柳を　　伏見院御歌

よはしともみえぬかなるかにたちの柳は春にあひぬる

文保三年後宇多院よりめされける
百首の歌の中に　前大納言為世
ひとかたに吹つる風やよわるらんなびきもそろはぬ青柳の糸
柳をよみ侍ける　西園寺前内大臣女
霧こもる岸の柳はひとすぢに霞にまよふ春の色
儀子内親王
吹みだる風に柳はなびきつゝみちて春をすむ鶯の声
百首歌奉りし時　権大納言公宗母
春雨の柳の糸に浅みどりそれぬ程の春風ぞ吹
名所柳と　土御門院御製
舟つなぐ影も緑に成にけり六田の淀の玉水の柳
百首歌の中に　前大納言為家
ひろ沢の池の堤の柳かげ緑もふかく春雨ぞふる
法印定円
吉野川岩波しのぶ柳まてやくそ春の色はみえけり
永福門院内侍
春はまづなびく柳のいとそへて風色のみえくる春の道かり
権大納言公宗
雨そゝく柳の末はのどかにてなびくは霧の色ぞ暮ゆく

古詩一句を題にてよみ侍りけるに黄梢
新柳出城墻といふことを
前中納言定家
ふる里はむくらのかとのつゐちより夕日を深み玉ぬく柳
柳とよめり
中務
なん年へてみれとも青柳の糸はふりせぬ緑なりけり
大江嘉言
岸のへの柳はいつて老まさり我世の春をとしくらしつゝ
人丸
百敷の大宮人のかつらけるしたり柳はみれとあかぬかも
梅花咲たる園の青柳はかつらにすへくなりにけらすや
よみ人しらす
貫之
よる人もなき青柳の糸なれは吹くる風にかつみたれつゝ
春雨の中に
藤原為基朝臣
浅みとり柳の糸にみたれつゝ露ふくもしるく春雨そふる
徽安門院一條
明ぬ世は長閑にて梅か香に柳の枝そ志るくまされる
春雨を
前大納言為兼
春の色にとりよりて夜風ふかみやしよ柳の末を下めくる

土御門院御哥

あさみとりかすみにこもる春雨に野なる草木そ色まさりける

権大納言公蔭

くれ竹にふりまされつゝつくと窓さひしき軒の春雨

従三位親子

見るまゝに軒の雫はまさりきておともせてふる庭の春雨

住吉社よみてまつりける百首哥の中におなしくを

皇太后宮大夫俊成

春雨ハ軒の糸水つくつくと心ほそくて日をもふるかな

題しらす

前中納言定家

春雨よ木葉みたれし村時雨それもまきるゝかたハ有けり

前大納言為兼

ふりさはもよひの窓の深夜にくもりて春雨そふる

従二位兼行

なかめやる山ハ霞てうく暮の軒のしつくそしつか春雨

藤原教兼朝臣

今すこし空ものとけき春雨にさきいつる花の色そほひさ

嚴安門院

晴わたる雲も霞にまよひきて雨吹しく梅香ちらせ

春乃御哥の中に

後伏見院御哥

春風は柳の糸を吹みたし庭よりかすむ夕暮の空

題をさくりて哥よみ侍りける河上春月

とふよと　前大納言為兼

うち渡すたちかはらのよそに小河着すまて月ぞすめる

百首哥奉りし時春月　前大納言実明女

風よわみひく柳の糸もそことなく霞かすめる春乃夜の月

題しらす　永福門院

なにとなく庭乃梢は霞ふきていりくかたちかき山の端の月

同院内侍

秋やまたも萩のうつろふ春乃夕空すまして今の月

ささすをよめる　俊恵法師

かり人のあさふむ野への草わかみかくろへかねてきゝす鳴なり

題しらす　人丸

ぬきさりに志のゝ小竹まて喚子鳥みよしの山を鳴わたるなり

喚子鳥を　前大納言為氏

人もなきみ山乃奥の夕くれにこゝろして忍ふかよふ人

百首哥の中に　太上天皇

浅みとりあをやき乃糸にみたれて春日のゝ花

題しらす　　儀子内親王

春日影世ハのとかにそなれるらし八重たつ霞春風そふく

春の色ハ霞の中に　　後二条院御製

あけわたる山のはそらの夕暮に芝生春風そ吹

永福門院

なにとなき草の花さく野への春雲にひはりの声ものとけき

前大僧正慈鎮

春ふかき野への霞の下風に吹れてあかる夕ひはりかな

千首哥よみ侍ける

前大納言為家

なく雁をかへらぬ空の白雲にかきゆくふりハ猶そ見えける

春すきてあつ　　従二位家隆

帰雁梢ハ見えてねふれる霧の中に数そ見えける

帰雁を　　藤原為秀朝臣

わかれてハ今名残なきまても春の名残なからんかきりあるへき

永福門院内侍

今ハ此月ハ霧乃庭にふけて帰りをさる霞の一つ

康資王母

ちる金の花の都にのこれる身ハ春の色をしたふ人ハ我のみ

春日社によみてまつりける百首哥の中に

あかしくと

皇太后宮大夫俊成

なにとなくさそひそかる浦路よりてやらん人はなけれと

題しらす

西行法師

吉野なる桜の枝はなにとなく花なきれともおもひこそすれ
いまさら浦花とこそゝと

俊頼朝臣

めくむよりまちきこゆるもあれはまてそも枝のいろもさき
もとをおりふしとまつ

鴨長明

さひやはんやまそてかなむもかんまきみぬ花の面かけにみて

前関白右大臣母

はなは風ちるとそてのこゝろゆかはもふかのいそ逝

朔平門院

春の歌の中に

さくら花梢のもとをたれかまちそひとかりかかるむ夕 言

永福門院右京大夫

花の歌とて

見るまゝに枝も花は咲そひて吉野すむらん山風暮

伏見院西園寺に御幸ありて花の歌
人〻よませ給けるに

前大納言為兼

やとことやものゝともそしらん朝まにみぬ家の桜花 あり

題しらす　　よみ人しらす

うちなひき春ハきにけし山さくら高ねの梢の咲ゆくみれハ

人丸

見わたせハ春日の野へに霞たちさきにほへるハ桜花かも

常ならふ桜の門ちへハ桜の花のとけくてまちをね

桜を　　中納言家持

春雨にあらそひかねて我宿の桜の花ハ咲そめにけり

寛治百首歌の中に見花　　後鳥羽院下野

山桜まちかねくて咲しよりもとハむかぬをとれの峯の白雲

春の歌よ　　民部卿為定

見よしのゝ吉野の桜咲しよりひと日も雲のたゝぬ日そなき

光明峯寺入道前摂政左大臣

ふみすてし志らぬ花園しらすにハ咲桜木末ハ春ハさかり

頃来の色ハかくて吉野山峯ハ白雲のみそ待らん

従二位家隆

後鳥羽院に五十首歌めされけるとき

深山花　　後京極摂政太政大臣

くりみ山いくへかさなりて梅りゝのもとや八重の白雲

題しらす　　前中納言匡房

白雲乃八重にとみえつるは高まとの山は花さかりかも

延喜十四年女一宮乃屏風の哥

貫之

山のかひたなひき渡る白雲はとをき桜乃みゆるなりけり

春の哥とて　前中納言定家

さとみせ杉のたちかくせ山桜ふりつゝ春乃一さかり

文保三年後宇多院よたてまつりける百首

哥の中に　後西園寺入道前太政大臣

山さくら霞乃匂ひ雲は色ものかはまてにほふ春かな

春乃哥中に　権大納言公宗女

花かゝる峯の雲は一むらは朝あけのころさかりめの空

前参議雅有

もさぬ宿乃梢もかゝるとや都の春は人とはるらむを

花を　左兵衛督直義

花みにと春はむれつゝ玉鉾乃道行人のおもひしるかな

延喜十六年斎院の屏風に人の花みたる

あちてみる所に　貫之

山桜よそにみるとて菅のねの長き春日を立くらしつる

天暦四年右大将屏風に山里人乃

花見んとくる所

まさしらぬ雨まてくさそこれは桜かりけれもなくとなり

寶治百首の歌の中に見花

従二位行家

桜ちるねさめのおやまさにみくしも打ちらへまかれ

花の歌の中に　藤原為秀朝臣

咲みちてちるへくもなきをもさそふ花は風のふくまゝに

伏見院花のころ雨ふりて御幸ありて後

遊せられける池殿にてよみ侍ける

永福門院太宗督

緑のこゝ花の梢もわかし山風はあらされはちりつれ

歌の中とて　前中納言為相

み吉野の花をこゝろに尋ねん人ならぬかさなれは花やみるらむと

桜をよめる　中務

石上ふる里小倉もなけれは昔なからに匂ひあふれ

寛平五年内裏の御屏風によめる小まきに

人のふるさとにおもしろき宿に桜のちらみなに

貫之

春ことに咲ける桜もいはとしもおもはぬとそおほゆる

大炊御門右大臣いまた大納言に侍ける時

三条の家にさくら花さかりなりける人々歌

よみ侍りけるに　　皇太后宮大夫俊成

あくかれむ宿の梢は花さかりきてとはゝ雲そたつ
そのちりてまくれとしりつゝそてす

と承る皇太后宮立后侍りけるとかん

寛治百首哥に翫花　　前大納言為氏

桜花ともやまとにしらかりそとこに千年は雲にまさらん

花下日暮といふことを

普光園入道前関白左大臣

ちるのをみれは日影（ゆふ日）もとまの山は桜にあそてくれぬる

永承（和）五年賀陽門院哥合に桜を

藤原家経朝臣

はくれ桜おもすやはつ山桜花ともとはゝみなしらす

題しらす　　西行法師

おほかたの月のおりを山桜花みる春はたよりあはせ

百首哥に　　太上天皇

見り包ひのとけきたともふりて春はなる桜なり

春の哥とて　　前左大臣

のとかなる鶯の音をさそひてもおそき春は鶯そなみた

法橋顕昭

誰ゆゑと人もとひてつきやらんひとりみまうき山桜かな
ちるをにおもひそめぬる花はなきれあかぬは花のならひなるらん
祝部成茂
寿成門院
けさは桜咲そふ庭の色思ひつゝ ねまくとふ人もかな
寛治七年二月十日法勝寺の花御覧し
けるついて常行堂のまへにて人々ゆり
侍りしさくらに京極前関白太政大臣ま
つりことをもてまいりてよみてさくら
ゆくすゑをもと奏し侍けるほ返し

白河院御製
山ふかく尋ねてこそ桜花なかめしものをおもひますらん
高倉院御時内裏より女房あまたいさ
なひて上達部殿上人花見侍りしに右
京大夫おりふし風のをおりてともなひ
侍りしほとこれは花の枝につけて侍りて
しけり
小侍従
ゆくすゑなれとものかれぬへきひとりみてさくものならは
返し
建礼門院右京大夫
風とはふ花のありかはいつとてもまそふかくもおもひしに

題しらす　源道済

初よそにみしにもかはらす桜花おりてそ人の中まて

前大納言為家

またひ人のゆきかふ路はかはれとも花にそ匂ふ春の木の本

前参議為実

飛鳥井乃雲のゐにしてねたやとりたかき花のかけ哉

いと桜乃はらに法勝寺とてよみてとて

浄妙寺関白前右大臣

またちりてをるともいへは糸桜心よりこそ春風の本

花の香あまたこそ見侍る中なれ

従二位為子

みよし野の梢いつとも里にあふにつけても花をこそえし

藤原為基朝臣

帰るにも桜をみせの花のはなれにくそゆかさ

百首の歌　大納言公重

こえやらてゆくすゑみよし雲白の雲のかゝる山のもしも

遠村花といふことを

後伏見院御哥

桜咲くそちの村のうちにもおりなさし人にゝかり

文保三年後宇多院よりめされける百首

百首中に　前大納言為世

重ねとて立そふ人も桜かり猶ゆくさきは花をたつねて

花の御百首乃中に　伏見院御製

枝わかぬ咲さかりなるもろ花に梢もとをき春のあけほの

従二位為兼

ゆかりとはみるもみえし花の色も猶咲つゝも本はなるらん

従三位親子

もえ出やまの霞やたちぬ春のゆめ花も乃霧におもふことなし

伏見院位人々に花の歌あまたよませ侍しを

詠けるに　従一位教良女

山のまの月は霞のこめにぬりも花の色そへ明ゆく

春の明ほのとふくると

後伏見院御製

花の上にはるゝや朝日の影晴て行へかたる嵐のをとき

進子内親王

吹しけ梢の花に露みえて春ねあらしそふく朝明

夕花を　永福門院

花の上にしはしうつろふ夕附日いるともなしに影消にけり

伏見院御時五十番歌合に春夕を

従三位親子

はる〳〵と霞てかゝる春の日の花静なるやまとのふる里

同歌合に春風を

前大納言家雅

ゆく〳〵とあさき霞の下に春風に花のかふれる宿の夕くれ

題しらす

花山院御歌

足曳の山より日の時しりそあまつ乃もふてりまきれぬ

伏見院御歌

花の香に霞の空にきえさりて影にえかの入相の鐘

厳安門院

そことなき霞のたなひきてちる花梢の色をわきまへん

進子内親王

山ふかき霞の空やへたてて花の匂ひもほのかに月け

前大納言為兼家に歌合し侍りける春を

従二位為子

花さかき梢の人にいまさへて霞のうちに月そ出ける

千五百番歌合に

前大納言忠良

咲さかむ梢の空に霞おちて花の雲より霞む月

春の御歌の中に

おくし春の名残をも花に契りきて桜にあけゝる
　　　　　　　　後鳥羽院御哥
在明乃月

風雅和歌集巻第三
春哥下
西園寺に御幸ありて翫花といふ事を講
せられけるに　　後伏見院御哥
万代の春日とならふけふなれとも猶あかなくはや覚
花乃御幸の中に
　　　　　崇徳院御哥
年ふまてとこそねぬる春とて花そめし心なりより
花とあへるくとしなひ侍らんてはさの
日つもりけり
　　　　後光明照院前関白左大臣

春をおしみてしけのこゝろまつ遅桜の花見侍けり
花の香り

従二位隆博

あちこちや何となる花の色は今年の春に咲むらん

三月に閏ありけるとしよめる

修理大夫顕季

常よりものどけく匂へ桜花春くはゝれる年のしるしに

千五百番歌合に

前大僧正慈鎮

春の心のどけしとても何かせん絶て桜のなき世之世は

惜花といふことを

後西園寺入道前太政大臣

老の身は後の春ともたのまれず花も我世をおしまはらめや

持明院より花を折て花の木ともにまいらせ給へりけるに三とせはかりありて

咲るとか聞えしかば

伏見院御歌

人のうへと我世のものを春はなほまちて梅の木道をぞ思ふ

雨中に花をおもふといふことを読ける

権中納言定頼

雨ふらは小萩もこそちれ花桜おりてかさゝん袖ぬるゝとも

源師光家にて人々よみ侍けるに

花を　　俊恵法師

あるとてもちりてもをしき桜かな一枝は家つとにせん

山家花をよめる

平忠盛朝臣

あるゝ花もちらぬ山里はいとゝ人めやまれんとすらん

屏風の絵に旅人みちゆくにさくらの花

ちるところ　　藤原元真

ゆきて雨にいそくとも我宿の桜はけふの風にのこらし

題しらす　　中納言家持

立田山こえつる桜もちりのまかふ我こそかゝき

花の哥の中に　二条院参河内侍

見る人のたのむやまかけにそもとは風にまかすなり

寛治百首哥の中に落花

藻璧門院但馬

雲海の風にあまよる雪とそみて人は袖に花のちらす

後京極摂政太政大臣家に六百番

哥合し侍けるに志賀山越をよめる

前中納言定家

袖の雪空吹風もひとつにて花に匂へる志賀の山こえ

正治二年後鳥羽院よりめされける百首歌の
中に　　　式子内親王

夕暮れハ宿の梢に風たちてしたまぬ露のこほるゝ

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

高砂の松のみとりもまかふまて尾上の風に萩そなひける

萩乃哥乃中に

前中納言為相女

あらし吹山の嵐乃にしきとめて秋の露ふむ行人のあと

萩花をよめる　前大納言為兼

さきさかり吹しつむ風ハやゝそよく萩そちりのとちる

入道二品親王法守

秋風のやゝ吹よはる梢よりちりそめにける萩の紅葉

院の位におはしましける時南殿乃萩みたれ
いとせ給へりけるをさかりて給へ
御前小萩のちりけるに奉られける

永福門院

こゝのへのたのめし花乃日数をもまちてこそみる小萩とも

返し　院御歌

おく露に咲ける花ハおく程をしもまちてとやおもふらん

花のころ小山よは春あるへりけるをとこの
よせ給ひつきの日はなをたまはせて

伏見院御製

身のうへにかかれる桜ふりぬともいやおほき雲の末の世を

御返し

後西園寺入道前太政大臣

花乃雪はてをともまかすたのみにそそれとの春の色もしられて

落花とよみ給へる

従二位為子

梢よりよそにさかりを吹あてて山のまへなる雲乃夕せ

嚴安門院

吹まよふ雲の嵐のひとつひとつあまきるるもふかき山のさと

正三位知家

なからへむ物ともしらて老の世にしも花のちるをみん

春のはるの中に

後鳥羽院御製

秋月世にふる山への山桜ちりにけりな誰にかまた
宇治まて山家見ん花とゝふらん

大納言経任

白雲の八重にかかる山の桜花ちりくる時やもとめん

百首哥たてまつりし時

入道二品親王尊円

桜色にうつろふ花は峯とのきふもとの山風ふかはさそはなん

落花を　従二位冨子

いかにせん色も嵐もうき世にはさそふもつらしちるもうらめし

鎌倉右大臣

春ふかみ嵐の山の桜花咲とみしまにちりにけるかな

左京大夫顕輔

ちるをこそをしむらめや世中の人の心のかはりゆくらん

寳治百首歌に惜花といふことを　安嘉門院高倉

一枝に風もうらみしをしめたゝいかにうつろふ花の心を

題しらず　前参議教長

ちるはうきりとの心にわすれてはまくらにきく花の庭かな

百首歌に　前中納言定家

ちりぬとてなとや桜を恨みんちらすはみまし春の庭かは

百首歌とて　従二位親子

すみれさく庭の芝生に花ちりて色ことにすむ野への夕暮

永福門院内侍

春のころ花をさそふはの夕暮の山の木かけにすさき春雨の空

閑庭落花を　前中納言清雅

ゆく〳〵と春ふる里の庭ちりて波よる花の名こりを

題しらす　藤原為顕

吹よする風にまかせて池水の汀にあまる花のしら波

百首御哥の中に　院御哥

梢よりおちくる花ものとかにて霞にをもき入あひの声

三井寺へまうてけるかへさに志かの浦を過侍るに

ふりにしみやゐのあとを見けるに花の盛

ちりにけれは　前大納言為世

故郷の花はまことそ散にける昔よりさくらに匂ふとそ見る

花笛宮といふことを　皇太后宮大夫俊成

まつ人へは花とこそまてとわすれゆく山桜花

花哥中に　太宰大弐重家

ねよるともいへとみえぬの花ならふとあふむかり

前参議為実

ちるをは浮草にかゝりて池の汀よるへ何思ふ

永福門院

瀬つきや岩にしからみとまる花もなかれとみれはそ見え

水上落花といふことを

従三位頼政

吉野川岩きれ波によるもや春はの峯にさゆる白雲

題しらす　　法橋顕昭

こゑとめてちるそやらまし清見かたせきもや波の寄る

雨中花を　　後鳥羽院御製

はるさめやよひの山の木かくれはぬるともをしき花の袂

山花未落といふことを　　大納言経信

しらみゆる山のこなたを桜ちるそさけたにそ散らむ
花の一朶ちりのこるとも人のをれはてといひけるはゝあり

道因法師

風あらはをしむひともいつくぬ一枝のもとにてこそみん

題しらす　　前中納言定家

おもふそや下葉よ海しはきつゝもふき分ておほえされ

百首御歌に　　院御製

散しまろぬるとや春くれてもちらぬ花のにほひをおもふきさ

苗代を　　安嘉門院四条

山川を苗代の水まてもれは田のもりにかれてもそゝなる

儀子内親王

桜ちる山下水をせき分て花よなかれを苗代のなかれ

九条左大臣女

春乃田のあせ乃ほそ路まおりさへ春乃あら田の苗代は
百千鳥乃中なり

今上天皇

我庭乃小川乃聲も揃ふりて末なき池の春みなくち

建保四年百首御歌よ

後鳥羽院御製

春乃小田乃苗代水にすゝきてあせこす波よ小川鳴なり

春歌の中に

西行法師

春霞ねこかる田にふかへと流れる遠き川水にもと鳴蛙

殷富門院大輔

みかくれてすたく蛙乃声すなり流るゝ水に苗代の水
蛙鳴苗代といふことをよめる

前大僧正慈鎮

春乃田の苗代水をまかすれはすたく蛙乃聲そなかるゝ

題しらす

伏見院御製

ゆふ月はかすみてかゝる木陰乃池より鳴也

中務

山ふきの花のさかりは蛙鳴なるやまも立とまるらん
左大臣家へ奉りける百首哥の歌合を

皇太后宮大夫俊成

昔きゝていつかめてし山吹の花をとゞめて井手の玉水

後鳥羽院御哥

春の御哥の中に

吉野川桜なかれし岩まよりうつれはかはる山吹の花

百首哥奉りし時　大納言公実

色ゝをとりもはなちてゆきに[illegible]河瀬に咲るやまふき

百首御哥に　順徳院御哥

河の瀬に枝をや移ていはなみにふすきはなる山吹の花

屏風に井手の山吹むらしくさきたる家の河の

ほとりに[illegible]ところ歎きありけるところ

これによりてせりそこいはあらしの

壬生忠見

おりてこそゆくてきかしかきねのみこそや[illegible]かげさへ咲

朱雀院の御屏風の絵に池のほとりに山吹

桜ちり女をされとあけてかんくゝあそり

藤原元真

我宿の庭へ山吹はちりぬとも花のさかりを人の家にも

見しらす　　よみ人不知

鶯のこゑする山吹にうつらてふ里にはもちる[illegible]

亭子院哥合に　藤原興風

吹風よ匂ひもあへすちる時ハやへ山吹の花もうらめし

春の哥の中に　後鳥羽院御哥

数々の花の露そふ玉河の流れてはやき春の暮哉

日吉社によみてたてまつりける百首哥に

前大僧正慈鎮

春ふかき雅るゝをちこちむかし霞つゝみの世の縁の暮哉

暮春の心を　伏見院御哥

霞まさる春の山への春の色ハ風なき乃りよ花とも見さ

三条関白このみてよめける此家の庭の咲

まじりめあるとみえしよそ侍ける

前大納言公経

年ことに春をたつねぬ宿あれと花咲そむる庭ともなから

朝庭とはいふるを

前大僧正覚円

世の庭咲比乃鶴ありまてまよりし花の色そまよはる

花しらす　俊頼朝臣

吹風よ庭沢のかくとみ渡せハ波ハ梢乃物にそありける

従二位成実

庭の花ちるハつきせぬ身なれや咲とみえしまに春そ暮ぬる

春乃哥の中に

永福門院

ちりまがふ山の岩ねに落ちしかば花の岩門のかげ

百首歌たてまつりし時

前大納言実明女

待し咲く山桜乃花よりも春をこそ見れと道にと雨詠をと

樵路躑躅といふことを

前大僧正慈鎮

山人の爪木にそへる岩つゝじ心ありてや手折らるゝつゝ

題しらず

後伏見院御歌

何となくみるにも春ぞ忘られし芝生に交る菫つみ

暮春浦といふことを

前大納言為兼

春のくれぬる浦の夕なぎにこぎきえて行舟もとゝ返

百首歌の中に

太上天皇

この比の夜山吹の花さかり春をとひやせむらん

進子内親王

春とてや嵐の末に吹よせて岩ねの苔に花ぞのこれる

春歌中に

藤原教兼朝臣

花の後も春のなさけはのこりけり有明のかすむ東雲の空

春の暮によめる

殷富門院大輔

身にかへてなに歎かんたえていとしのゝやは春にはらふ

藤原長能

ゆきてみんみ山かくれの遅桜あかす暮ぬる春のかたみに

三月晦日人々によみ侍りける

俊頼朝臣

とゝめえぬ身そ春風はかすめゆく恋ともしらせまし

やよひのつこもりに花はみなよりの嵐に
ちりはてゝ独りや春のかへるらんと
法印静賢へやして侍りける

皇太后宮大夫俊成

おしむへき人の心しなかりせは独りとやは春の帰らん

三月盡のころを

貫之

こむとしもくへき春とはしりなからけふの
くるゝはおしくそありける

風雅和歌集巻第四

夏歌

後鳥羽院よりめされける五十首歌中に

後京極摂政前太政大臣

昨日まてはすゝしりのをしむの春の雛波まてくの衣の枕の

首夏を

後伏見院御歌

春暮て昨日と思ふ隔てよりやゝけさの衣山の色

寛治百首歌の中におなしくを

前大納言為家

夜さえてはひとへの衣きたにはいそく春を立つるらん

正治二年後鳥羽院よりめされける百首歌の中に

式子内親王

桜色の衣にもまたわかるゝに春をのこせる宿の藤なみ

百首御歌の中に更衣

後二条院御歌

桜色の衣はひとへにうつりかへて春をとゝまらぬなりけり

院御歌

四月のはしめにもまた世経けり

花鳥の春葉によろこひしはや夏衣すゝみなれにし山河鳥

後鳥羽院よりめされける五十首歌の中に

従二位家隆

時鳥まつとせしまに我宿の池の藤なみうつろひにけり

千五百番歌合に　前中納言定家

時しらぬ里は玉川いつとてか夏のかきねをうつむ白雪

前大納言為家家歌合に卯花を

前大納言経房

ぬきまつ卯花も山とみ渡せは空にしられて行月の白雲

鶉しらす　前大納言為兼

夜もすから峰よりかはる木の下庭にたえぬ雨ふりしきる日ころの

夏絹雨といふらんと

権大納言公宗

うすくこき青葉の山の鶉あけよふるとしもなき雨そそくなり

夏歌に　後一条入道前関白左大臣

いかにして二葉より見そめて幾代のあふひかけぬらむ

院に三十首歌めされける時葵

兼清経

我とやはかもとみなまにかけしあふひ葉二葉よりうちたのめつつ

嘉元百首歌の中に郭公

前大納言為藤

あふひ草かけし卯月の時鳥人の心にまつまつらはん

鷹司院按察

我ためにおもはしもなし時鳥ことゝをたれにとふらん
四月なかりに人のよりといひやりけり

源頼貞

待侘てさやまつらん時鳥人はほのかにはつねなかれ
郭公とよめる

刑部卿頼輔

名をへてしるらん思ふ時鳥あかつきさそ経り

嚴安門院

年をへてまつにし鳴音を郭公なにはおもひをつくしてき
百こゑなかりし時

左兵衛督忠義

いとせめて待こそはかねと郭公山時鳥月よなくらん

権大納言公蔭

郭公さやかにきけはよそに来雲まよりけふのゆふとも
後京極院よこさまなりきこえし河郭公

前大納言資季

石清水たきつ川波おちそふ山時鳥こゑになかるゝ
時鳥と

前大納言為兼

おりまつていまこそになく時鳥涼しき声やそふ

右近大将道嗣

待えてもまたうつりぬる思ひはさてもあさき時鳥かな

里郭公といふことを

入道二品親王道助

呉竹の伏見の里の時鳥こゑのふし二代乃よゝてやらん

伏見院に三十首歌奉りける時郭公

前大納言為兼

時鳥人のまとろむ程とてや思ふらんいまてそなき
出しらす

前中納言為相

まちわひてやすらふほとに時鳥ねてまねやその初ねを

堀河院に奉りける百首歌に郭公を

京極前関白家肥後

山ふかく鳥さへねぬ夜は時鳥思ふ声もなくなる五月哉

夏歌の中に

前中納言定家

忘れしな去年の五月の一声を忘れて待めつらしき時鳥かな

連夜待郭公といふことを

俊頼朝臣

時鳥まつ夜の数はかさなれと声ハひとつもねかてなけり

関郭公

前参議雅経

時鳥おのれなくねを詠そと人もとなにしてそをり

藤原為基朝臣

猶そまつ山時鳥一こゑのなこりと雲にしられぬるかな

鎌倉右大臣

足引の山時鳥み山いてゝよふかき月のかけになくなり

正治二年後鳥羽院よりめされける百首哥の中に

式子内親王

時鳥よこ雲かすむ山のはの在明の月に猶そかたらふ

夜の御哥の中に

伏見院御哥

郭公なこり忘れのあけほのゝ鳴つる峯は雲間なりけり

むらさめの山よりあまるしめやかに嘴のさゝへいそくは

やすみなくとせんと契待けるに里には出

なかりけれは世にまちけるは四月十日ころに

つかはしける

祝部成仲

里なるゝ山時鳥いつまては待宵にしもなかせのみ見

為郭公彼路関といふことを

正三位季経

為つるひかきれと時鳥くる山路よ一声そなく

思しらす

後鳥羽院御哥

為いさかきれ時鳥たまゆらへたつるすゑの山のはにきく

前中納言定家

なくさめに山郭公鳴とて我しもしのふ杜の下を

藤原仲実朝臣

夕まくれいつちゆくらん郭公神なひ山にしのひてそなく

延喜の御時古今集えらひしめられたるに

夜ふくるまて御前にさふらひぬるに郭公の

鳴けるをきゝて

貫之

こと夏はいかゝ鳴けん郭公こよひはかりはあらしとそきく

時鳥を

従三位頼政

郭公おそくもあるか名のみを月かけしよそにもなかめやはせぬ

待賢門院堀河

ふる人もなき庵のこのまよ我のこゑのみか郭公か

千五百番歌合に

前中納言定家

まきれつゝ年にまさるか郭公さ月のひかりにあまのかみそ

そしらす

前大納言為氏

あやめをもふきそへてまつ五月雨の郭公やかりにそ鳴

前大納言為継

伏見院の御時五十番歌合に五月雨をよみ

ほとゝきす山のはにこゑをのこして誰か
待けん

前大納言経親

あさち咲梢は曇りやゝ晴て影のはやまにおつる玉かな

夜の哥の中に　　院冷泉

はやめてふ影の末を見えしふもとにむかふ有明の空

百首歌奉りし時　　左近中将忠季

夕月秋をしらふ空ハ涼しくて折あかやめ小風そわたるなる

前大納言公泰

萱ふくそともの山の村雨に涼しさそへてとる早苗かな

早苗を　　前大僧正慈鎮

まくらぬ田はるまへの葉末なひくや山もとちかく蛙の声きく

寛居百首歌の中におなしこゝろを

従二位行家

三輪河のみをさへくやまかねる梢はさ田ハはなへける也

冷泉前太政大臣

早まりハさ月さなえとやいそくらん山田のはなへかな日をふる

前参議忠定

早苗とる田面の水の浅みとりすゝしき月に山かせそふく

百首歌奉りし時

藤原為忠朝臣

夕日さす山田の原をみわたせハ杉の木かけにほるかへるも

夜御哥の中に　　後伏見院御哥

小山田やなへの末葉に風みえて行て涼しき松の下かけ

太上天皇

風すくる田面の早苗なひきあひて入日のこれる森の松かけ

進子内親王

早苗とる山本小田に雨晴て夕日の影にまよふ浮雲

院一条

雨つゝく小田の早苗は山すそに雲おりかゝる松のむら立

山家五月雨といふ事を

従二位為子

山のはや谷よりのほる五月雨の雲は軒まて立みちにけり

嘉元百首歌に五月雨を　後山本前左大臣

かは水の汀の岩さへ流こえてみくさかくるゝ五月雨の比

千五百番歌合に

参議雅経

五月雨にこえゆく波やしけゝらむ河そひつゝくみなれさほ稲岸しらす

権中納言公雄

飛鳥河ひとつ渕とやなりぬらむ浅瀬のみえぬ五月雨の比

河五月雨を　正二位隆教

五月雨は岸の青柳枝ひちて梢を分ゆくよとの川舟

宝治百首歌の中に　渓五月雨

源俊平

なきそふる山の峯は五月雨にあさせもふかき菅の川かな

夏哥とて　藤原清輔朝臣

田子のうらのもしほもやかぬ五月雨にたえぬは富士の煙なりけり

従二位成実

河社ふかきみふねに五月雨に衣かけてもほすひまやなからん

後宇多院に奉りける百首の歌の中に

法印定為

五月雨はまた雨雲の月影にかねやもる露そ涼しき影もしらず

後京極摂政前太政大臣

五月雨の雲まへそてゆく月の光はさてもかゝるかな

二品法親王覚道

あめ雨よりかゝる月影とたえきてゆくひかりあさきのそら

亀橋を　修理大夫顕季

我宿の花橘やにほふらん山ほとゝきすきまさすそなく

文保三年（元応二）後宇多院へ奉てまつりける百首の歌の中に

民部卿為藤

月の夜に鵜舟のかゝり火さしそへて曉やみの河となりけり

鵜河を　中務卿宗尊親王

大井川うふねはそれとみえわかて山もとめくるかゝり火のかけ

弘安百首歌奉りける時

前大納言為氏

おしかまつさ川のきしのほくしのみえてよそにゆくかはしけ山 山

照射をよみ侍りける

藤原義孝

さ月やみそこともしらぬさりしとをふ山のはまそにほひ つゝか

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成

まとろまぬやまふ山のかくらん夜かはに蛍のかけそみえける

三十首御歌の中に夜水鶏といふことを

永福門院

まちけさ木の下やみのくらさにもたゝくとしてそ水鶏 鳴也

水鶏を

後伏見院御歌

山かけの夜半のしつけさにして和なる木のまの月に水鶏鳴て

百首歌奉りし時

前大納言実明女

水鶏鳴森の一むらは木くらくて月よ晴ける野への遠方

夜歌の中に

郁芳門院安藝

枝のまをしのひてもなく水鶏かな月の光なすとみえし

祝子内親王
松のはに月はさやけくもみえそめて涼しくむすふ叢の露
後京極摂政前太政大臣
雨はるゝ軒の雫に影みえてあやめにすかる夏の夜の月
前関白右大臣
茂りあふ庭の梢を吹分て風にもりくる月のすゝしさ
百首歌奉りし時
中納言重資
うたゝねは涼しき影をとゝめてもまたるゝ月のつれなさ
夏歌の中に
従三位盛親
さらぬたにねやもる窓の月の影しく床の涼しき
伏見院新宰相
秋ちかし月まちえてもむすふそてねやもる風
前大僧正道意
山かけの岩もる水とみゆるかな涼て木のまの月の影そ涼しき
藤原隆祐朝臣
よひのまにたえてまふ雲のたえまよりみえしは涼しき月影
夏上夜月を
賀茂重保
夜はなほ岩ゐの清水月はえてむすへはところ涼しかりけり
雨後夏月といふことを

後京極摂政前太政大臣

夕立の風にわかれてゆく雲にをくれてのほる山のはの月

千五百番歌合に

後鳥羽院御歌

まつよひの月待とても明ぬへき夏の夜ならすともなく

夏の御歌の中に

伏見院御歌

月や出る星の光のかはる哉すゝしき風の夕やみの空

まとろみはつるおほまへの宿もしつまりて更て白き庭の月　勝

夏夜といふことを

従二位為子

引むすふ窓まてる家にて吹ともしらぬ風そ涼しき

題しらす

小野小町

夏の夜のわひしきことは夢をたにみる程もなく明るなりけり

千五百番歌合に

寂蓮法師

いにしへの野中の鏡影さへて見えぬはかりに夏草茂りけり

百首歌奉りし時

前関白太政大臣基

庭清き玉江の水の小花露のかけさへすゝしかりけり

螢を

式部卿恒明親王

月はすゝみ庭の風まてまちすゝて行の螢我にみゆるや

順徳院御製

池の水は風も音せてちるさゝ葉にみたす玉は螢なりけり

後一条入道前関白左大臣

螢とふさは山かけの夕やみは秋よりさきにはやそ涼しき

寛治百首歌の中に水邊螢

皇太后宮大夫俊成女

梢ちかき雲井まてとや飛螢沢への水に影みたれつゝ

正治二年後鳥羽院によませ給ける百首歌の中に

式子内親王

梢風とりやさくら夕暮の雲ちかくまてゆく螢かな

遠やゝ風のたよりにみたれては葉ことにみたる野邊のさゆり（ゆりそ）

夏歌の中に

如願法師

山ふかみさえぬかほとは見えて又夕雨の宿の夕暮

建仁元年百首御歌の中に夕立

後鳥羽院御歌

こゝ嶺のわかちかねてより吹風にさそはゝ夕立の雲

千五百番歌合に

同院宮内卿

衣手に涼しき風を先たてゝくもりはしむる夕立の空

宝治百首歌の中に夕立

前大納言為家

山のはゝ峯の日影はさしなからふもとは涼しき夕立の空

百首歌奉りし時夏歌

前大納言経顕

と山には夕立さりし跡の行雲よりあまるはるゝまの月影

題しらす

前大納言為兼

松をとふ風はふきそふ野の草におちて夕日の雲にきえき おもや

厳安門院

行雲やゝてる日くらき山もとはおちこちしけや夕立の空

院に三十首歌めされし時夏歌

前太宰大弐俊兼

虹のたつふもとの杉は雲にきえて峯よりはるゝ夕立の空

夕立を

厳安門院小宰相

帰りゆく雨を送りて風もやゝそらに吹行夕立の雲

夏歌の中に

宣光門院新右衛門督

夕立の雲吹はらふ追風に梢の露そ又雨となる

百首歌の中に

院御歌

夕立の雲飛わくる白鷺のつはさにかけてはるゝ日影

文保三年後宇多院に百首歌奉りける
時夏歌　後西園寺入道前太政大臣

月ならてまちわひし人のよはゝ雨つゝきまて涼し夕立の雨

後山本前太政大臣

行水も日影はかけぬ竹のはに涼しさそゆる夕立のあと

題しらす　藤原為守女

ゆふくれはしはしとたえて村雨のはるゝ梢の蝉のもろ声

夏歌とよませ給ふとて

今上御製

風わたる松の木かけに立よれは空もすゝしき日くらしの声

蝉を　進子内親王

雨はれて露吹はらふ梢より風にみたるゝ蝉のもろ声

夏歌の中に　二品法親王尊胤

蝉の声は風にみたれて吹返る梢の末葉に雨そ過る

式部卿恒明親王

暮かゝる梢に蝉の声やみて庭に影さゆる月そ涼しき

百首御歌の中に

院御製

そら晴て梢色こき月のよは風におとろく蝉の一声

後京極摂政太政大臣家に六百番
歌合し侍けるに蝉をよめる

藤原隆信朝臣

鳴とほすひまもとさけはきをにやそ鳴らん蝉のなく声

納涼と

伏見院新宰相

なく蝉の声やむ杜に吹風の涼しさまさる入日も暮ぬ

藤原為秀朝臣

夕附日梢によわく鳴蝉の音に山かけハ今そ涼しき

建仁二年新宮歌合に雨後夕蝉といふ
ことを

皇太后宮大夫俊成女

雨晴て雲吹風になく蝉の声もところて杜の夕暮

題しらす

曽禰好忠

蘆の葉にかくれて住は難波なるこやハ夏こそ涼しかりけれ

中務卿宗尊親王家百首歌に

平政村朝臣

奥山の岩ねをつたひに瀧おちて夏も涼しき水のおとかな

深夜納涼と

覚誉法親王

吹分る梢の月ハ影ふけてさえわたるよの風そ涼しき

夏の御歌の中に

後鳥羽院御歌

さゝれ葉の下葉にかよふ松かえに萬世かけし波の音そすゝしき

題しらす　今出河入道前右大臣

風かよふ山松かけの夕そゝみ水のこゝろもそこよりそ澄

従二位兼行

夏ふかき日の夕影かそえたのはよ雲一村のたてそ涼しき

祝子内親王

日の影は行より西につゝきて夕風すゝし庭の草むら

権律師慈成

山川の水底清き夕波にひくまそみるも涼しき

権大納言公蔭

山かけや木の下めくる小車にたゝぬにそすむ風そ涼しき

夜納涼といふことを

進子内親王

まちあかす月はさなから木の下にすゝしき水の音そまさる涼しき

題しらす

従二位兼行

苔あをき山の岩ねの松かけに涼しくすめる水の音哉

前大僧正慈鎮

夜ふかき嶺の松かえ風こえて月影涼し在明の空

寂蓮法師

あさちふは蝶まふ程や暮ぬらむさそはれ出る蛍かすく

永福門院

草風に葱よりみえぬ雲風も野分にゆくる夕露

夏月を　　大納言通方

涼しさは月をやとして山の井の底の心にしるやらん

暁風似秋といふことを　　前左大臣

松ふく風も涼しき山かけに蝉おちかへる日くらしの聲

夏の歌の中に　　伏見院御歌

鳴声もたえたる梢の蝉の羽にかよふすゝしき日影は晴てちりて

文保三年後宇多院にたてまつりける
百首の中に　　権中納言公雄

みそきする河瀬の波にゆく秋をかけてそ涼しき

六月祓を　　円光院入道前関白太政大臣

此祓するゆくせの浪もはやく涼風ちかし秋の関

順徳院御歌

禊川夜のゆくてはしらねとも秋まてちかきせゝのゆふして

風雅和歌集巻第五

秋歌上

後京極摂政左大臣に侍ける時家に六百
番歌合し侍けるに残暑を

前中納言定家

秋きても猶夕風を松かねに夏をわすれしかけそたちうき

宝治二年百首歌人々にめされける次に早
秋を

後嵯峨院御哥

風のをとに驚かるゝ今朝よりやとおもへは秋の始なるらん

藻璧門院但馬

白露はまたおきあへぬ夕くれの袖よりさきに秋の初風
そしらす

正二位隆教

露おもみ浪もよりて嵐ふく荻の葉むけもまた秋の初風

秋歌とて

入道二品親王法守

おちそむる桐の一葉の音のうちに秋の哀をきゝそめにける

権大納言公宗

夕暮の雲にほのめく三日月のはつかなるより秋そ見えける

前大納言為家

ゆふま暮梢をかたの山のはにほのめきそむる出る三日月

初秋露を

権大納言公蔭

露さそハまねて雲ゐにさし月乃光添ふる萩のうへの

正治二年百首哥に

式子内親王

なかむれハ木葉うつろふ夕月夜やゝけしきたつ秋の空かな

名所百首哥の中に佐保山

従二位家隆

露の色ハまたこもりけむ佐保山を山もとさして露もなく

題しらす

前中納言定家

山里ハせとくれとも秋ふけてそともの桐の下葉おつなり

従三位宮子

色かはる夕日の山に秋みえて梢ふかくる日影乃色

権中納言俊実

けふもはや木葉の夕日うつろひて秋すさましき風の音声

永福門院

むしのねの声する行まゝの日影をも露の色にそ秋そ見えける

七月七日よみ侍ける

凡河内躬恒

幾とせかやとく嘗なん夕露の天の河辺をたちわたりなん

文保三年召てまいりける百首哥に

後山本前左大臣

ふみみすとも返事に天川よきのわたりに書てまゐらく

文永十年内裏にて七夕七首歌講せら
れけるに　前参議澄康

あふことはとしに稀なる七夕の契りやうすき天の川なみ

芝しらす　清輔朝臣

とひやかなしと涼し彦星のつまむかへのあまの川せ

よみ人しらす

天の原ふりさけみれは銀河霧たちわたり光みえけり

尚侍貴子四十賀民部卿清貫し侍ける

屏風に七月七日ゆひまうけみる所

伊勢

めつらしく逢ふ七夕はよそ人も影見まほしき物にそありける

七夕の歌の中に　紫式部

おほかたのこゝろはゆるし天の川かみの逢瀬はうらやまれけり

前中納言定房

天河あふをまちけるしら浪は幾代をへてもたえぬなりけり

大宰大弐重家

七夕のあふせはこれ天河やまをみてかはるともなかれ

後光明照院前関白太政大臣

織女の契りは絹の糸なれとしてまつみつる秋は年にさへ

源義詮朝臣

年をへてかはらぬ物は七夕の妹せとちきる契なりけり

百首哥の中に　　太上天皇

梢をぬらし星合の空に月はへて林風さえて庭の灯

七夕のこゝろを　　後光厳院御製

七夕に心をかして歌よめは明かたちかき天の門の秋

後宇多院大覚寺におはしましける時七夕

七百首哥の中に小野女郎花を　　前大納言實教

いとゞ猶野の妹の女郎花むつるよそにてぞ見

殿昭久しくかとつまはりつまにたゝ中つ

しけり　　前左兵衛督雅方

秋来ては萩もふるえに咲物と人こそまりよそのみは

返し　　法橋顕昭

我心まくらかすよそに萩の下葉よそは露にに

草花露涼といふことを　　従雅朝臣

あだし野の萩が花そよ林風まさりて露や玉川の

萩をよめる　　安嘉門院四条

はかなくも萩の古枝の妹かなりけるの心を人のしほ

秋の御哥　永福門院

ま萩ちる庭の秋風身にしみて夕日の影そかへにきえゆく

前中納言定家

風吹は枝もとをゝにをく露のちるさへおしき秋萩の花

乾元二年伏見院五十番哥合に萩露を

九条左大臣女

三か月のかけに枝ゆみえしかと秋風にほろゝとおつる萩の上露

題しらす　藤原公直朝臣母

一むらの雨はすきぬる庭の面にちりてうつろふ萩の下露

従三位盛親

秋ふかき花ちる萩はうつりすきて物おもふ葉にみえそしらしき

籬落を　前大納言為氏

露にふしなひきし萩は分まてそ尾花そ白き籬の庭

秋の哥あまたよませ給ける中に

伏見院御哥

庭の面に夕の風は吹みちて高き荻の葉のおとそさわく

みよせはふそ野のたもと吹しをりて夕暮かけし山嵐の世

進子内親王

秋さむき夕日は嶺によこをれて野の花もよ風ふかきふと

風前草花を

従三位親子

まきのやもむれたる花のおとも静まりて風吹雨の音そさひしき

百首御歌の中に

院御製

吹みたりなひく荻のはすゑことのはにうつろふの秋風
ふしくと

九条前内大臣家百首歌に寄村秋夕と

藤原隆祐朝臣

夕日さす芝ふかき里みえて荻吹しく野人の袖風

荻を

二品法親王慈道

身をとかく宿にかはらて荻の葉にたよりありける秋を色そ見る人

秋の歌の中に

前大納言為兼

衣手もそのゆふしのゆふくれにおもひつゝ秋そさひしき

源重之女

まねくともたのまぬやいかに萩露にしたまふらんたのしき

後法性寺入道関白右大臣に侍りける時よませ侍ける百首歌の中に荻を

正三位季経

吹風のおとはかはりてゆふくれは荻の葉しけき人をまつかな

前中納言定家

うちしめり荻の上葉をわたる吹風にあはれの秋そ

荻風を

伏見院御製

こゝにのこる哀やとめる梅風乃おきされらへすゝ虫乃宿

前大納言為兼

吹まよふ色ある風のやとりまてなれせぬ萩も松むしのふ

百首歌奉りし時

入道二品親王法守

庭さむきいさこに月はうつろひて松風よりそ秋のふかく

秋歌とて

前太宰大弐俊兼

うす霧の空はかけのふ流れそめて蓬の末葉に露そこほゆく

藤原為守女

松虫はいふに哀のとかりにやとるもかよふ袖の露哉

藤原重顕

光そふ草葉のうへは数みえて月を結ける露のおほかれ

庭草露といふことを

如願法師

ふみ分て誰かはとはんよもきふの庭も難し秋の白露

千五百番歌合に

後鳥羽院御歌

哀むかしいかなる野への草葉よりかゝる秋風吹はしめけん

題しらす

前大僧正覚円

村雲に秋さへまよふ梅の日かけやとるもなき露

従二位家隆

おさゝ原枯風吹ぬ家又いかならむのなかんとすらん

伏見院御製

柳風はさそふ葉末を渡る夕日の影は残りて

藤原為基朝臣

鷺のゐる柳の葉はちりて枯て野沢の水も秋ぞさびしき

柳の歌とてまゝに世絶けふの中に

院御製

遠近の晴ゆく雲間に秋の日さすかれ枯松の山

永福門院

夕かけの岩根の苔に影さえて枯れ柳は柳風ぞふく

前大納言為兼

柳風よる雲たちてかゝみゆく夕日にかゝる岸の柳

伏見院御製

庭ふかき柳の枯葉ちりみちて垣ねおほゝる柳風のやと

百首歌の中に

花上天皇

河とをき夕日の柳影うつて鷺の翅に秋風ぞふく

前中納言重資

影よわき柳の末の夕附日さひしくうつる秋の色かな

秋歌とて

従二位家隆

玉鉾やわかるゝあすの河柳下葉ちりしく秋風ぞふく

儀子内親王

うす霧の山本とほく鹿鳴て夕日をさそふ岡のへの松

さやの中山といふ所にて鹿乃なくをきゝ
てよめる

橘為仲朝臣

旅ねするさやの中山さよふかみしかぞなくなる妻や恋しき

題しらず

藤原為秀朝臣

暮かゝる籬のもとのみえわかて霧にこそおきさる声

百首歌奉し時

徽安門院一条

色うらぬ小萩乃露もかはりて霧にみゆらん遠の山もと

秋の歌に

寂蓮法師

木枯よ月すむ嶺の鹿の音を我のみきゝてあかしつるかな

千五百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

物思へとしもなきわさならし木の間より露ちる月は袖のうへの露

野鹿を

前大僧正慈鎮

武蔵野の草はゆかりのひともとも白露やをきて鹿のなくらむ

題しらず

貫之

秋萩乃こぼるゝ玉はなく鹿の声よりおつる涙なりけり

堀河院百首のうちに簾を

基俊

風さむみそゝろ寂しき旅のよは山里てことよの簾をぞひかる

おなし心を　前大納言成通

秋の夜はすから妻とふ簾をとさくらに我さへおやふいそ神まて

正治二年百首のうち

式子内親王

山里は峯の木のはにさそはれて雲よりおろすさとのみ

文保三年後宇多院よりめされける百首

その中に

民部卿為藤

小山田の庵の簾も秋さむみそていなみ

風よ簾そ吹かる

風雅和歌集巻第六

秋歌中

初雁をよめる　俊頼朝臣

初雁ハ雲井のよそに過ぬれと声ハ心にとまるなりけり

院五十首歌合に秋視聴といふことを　藤原為基朝臣

夕からす柳のうへに風過て秋の日さむき初雁の声

儀子内親王

吹しをる千草の花ハ庭にふして風にみたるゝ初雁の声

雁を　前大僧正道玄

こゑはかり朝風にむく初雁の鳴空みえぬこゝろあかりて
悲しらす

後西園寺入道前太政大臣

村雲によこきる雁の数みえて朝日にきゆる嶺の秋霧

百首御歌の中に　伏見院御歌

朝ほらけ霧の晴まのたえ／＼にいくつら過ぬ天つかりかね

伏見院に三十首歌めされける時霧中雁を　従二位為経

霧はるゝ夕の日影に山のそにかけてゆく雁の一行

秋歌に　後伏見院中納言典侍

夕日影はひくこゆる山のはの田ゐにかゝれる雲の一つ

百首歌たてまつりし時

覚誉法親王

夕霞むらくも遠き山のはに日影をとゝむる松の一むら

大納言公重

志賀の山こえて数もおほえぬ林霞に翅やかさぬ天津かり金

和歌所にて暮山鳥といふことを講せられけるに

皇太后宮大夫俊成

をくら山ふもとの寺の入逢はおねのはるゆふ鳥金

従二位家隆

それとなくうちしれる山の夕霞に嵐そかよふ袖の鳥の急

秋歌の中に　伏見院御哥

うつり行て天とふ鳥の翅まて夕ふにむかふ影そのこさ

百首歌の中に　院御哥

雲にとき夕日の行えに山さしゆくともみえぬ鳥の一つ

関白右大臣

今はまつ入日の影は数みえてとをちの宅を渡る鷺

秋哥とて　嚴安門院

鳥のなくとをちの山は夕日にて影は志つかに殊むる雲

前大納言為兼

夕日うつる柳のこすゑに蟬はよそになく秋の声もすゝしき

大江宗秀

蟬のなく青葉の山のすそこえてちるくるはなし

永福門院内侍

蜩の鳴夕日の空のうす雲にまた見えぬ月そほのかなる

二品法親王尊胤

秋風のふきしみ空は雲晴て月にかはらぬ蜩の一つ

蜩を

つまてふおもはぬ翅よそになりて月の出てぬる蜩の声

伏見院御哥

正治二年後鳥羽院にたてまつりける百首哥

の中に　式子内親王

荻のはに蜩の涙におく露はこほれにけりな月なきて

百首哥中に　巌安門院一条

忘らるゝね覚の月に今宵ことに思ひをさそふ小野の蜩

秋哥の中に

賀茂保寛朝臣女

杉のはね覚の窓と蜩の宿にしつまてや鳴らん

和泉式部

蜩の鳴夕くれにみ渡せはよりの梢も色付にけり

題しらす　よみ人不知

雲のうへに鳴つる蜩の声さへに木の下葉はいろつきにけり

穂積親王

けさのあさけかりかねききつ春日山もみちにけらし我心いたし

貫之

朝霧のおほつかなきに妹か田にかりに出てなく鶴そ鳴なる

春日社に奉りける百首歌の中に

前大納言為家

色々の梢とみれはかつ山の初雁かねにいそきそめけり

霧中雁と

後伏見院御製

天津雁雲のあなたにこゑはして門田の霧に鳴なり

月前虫といふことを

永福門院

蓬生はいつくそ草もなかさせてしも庭の虫の月

藤原定成朝臣

きりくさて月をや見つゝ庭とくく草のかけに虫そ鳴覧

秋虫と

前太政大臣

よひのまは猶まとろみてつゝ虫のねも更てそきけ蓬生の庭

章義門院

題しらす

わきて猶とはゝ庭をもはらはてあれのこゝろの虫や鳴らん

棲心院内大臣

野への色もかれのこまはゆくあさちふにまつともなき松虫の声

百首歌たてまつりし時
権大納言公経
萩か枝のつゆにねも移しかへぬるひまもる月そやとる
秋の夜とて
後京極摂政前太政大臣
虫のねはあかしれぬ浅茅葉にうつりまて霜夜よ村雨そ
従二位兼行
萩鳴秋をとはむとなく露にあさちか上そ色かはりても
結ひ見し花乃色にそ人ことによせ
ことを結ひけり猶あと
前大納言為兼
庭の虫は鳴とまりぬる雨の夜のかへにおとする蛬
文保三年後宇多院にたてまつりける
百首歌の中に　今出河前右大臣
秋さむみ枕のしたに蛬ふしゝの猶鳴りける
思しらす
西行法師
何となく物かなしくそみえわたる鳥羽田の面の秋の夕暮
建仁元年百首歌の中に
後鳥羽院御歌
露霜さむき小田の面の秋風に玉ゆらやとるよひの稲妻
秋歌に
大納言公重

秋の田にまたかりあへぬをとや(?)いふにさすかよひの電

仙洞三十首歌めされし時稲妻を

権大納言公経

夕日さすとを山の梢秋さひてふもとの小田も色付けり

百首歌奉りし時

前内大臣

小山田の露のおくてのいなはに宿月をとゝしく庵の独は

知しらす

前大納言経房

秋ふかき山田乃庵にかりねして秋風寒み鶉なくなり

正治百首歌奉り

式子内親王

うつりゆくひかりのあさちふの草葉の末よりすゝむ露をてらす宵(かく)

稲妻を

藤原為秀朝臣

篠原のしもと(?)あれぬ光のもと葉乃露の数もみえけり

従三位実名

秋の夜の晴行跡の雲まより出るかけのむくらにひかる稲妻

前大納言為家

夕やみに見えぬ雲まもあらはれて時々照すよひの電

秋乃御歌に

伏見院御歌

まちかねてひさしき月のおそき山のはに光よりほのかにいなつまのかけ

永福門院

月をまつくらきまかきの花のうへに露をあらはす宵のいなつま

待月といふことを

後伏見院御哥

契あらは影の松風庭の虫夕暮ふけて月やまつらむ

百首の哥の中に

太上天皇

草むらの虫のこゑより暮そめてまさこの上そ月になりゆく

秋の哥に

院一条

草かくれ虫鳴そめて夕霧の晴まの影に月そみえゆく

伏見院新宰相

影うすき月みえそめて庭の面は草に虫鳴宿の夕暮

祝子内親王

峰さかる竹のあなたに月みえて籬にしけき松風の音

前大納言経顕

立のほる峰の松の木のまより見えそめて山の端に月そさしのほる

百首の哥たてまつりし時に

関白右大臣

いまたやまくるゝ月そ白むらし村雲しろき山の端の影しらす

永福門院

くまもなき國のおさまれるしるしとや山とのかつら月影
前太宰大貳俊兼
月のかつら山に雲晴てみよりなそともらぬあきらせ
百首御歌に　院御製
萬世をへても見まほしのかつら山ちとせの月の松の下てる
月歌の中に　婧子内親王
山のはを出ぬとみゆる程まてもぬれその里は月そゆかしき
前大納言為氏
桂かは松かへに吹かぬ木の葉ちりまとつゝ夕暮の月
藤原定宗朝臣

出るより雲もかゝらぬ山のはをさえつるゝのかつら秋風の月
八月十五夜伏見にて御幸ありて人々よめり
月の歌よませ給ひを続けるつゐに
伏見院御製
影ちかき松原山の秋風はよる夕暮こそ月すみなり
秋歌とて　前中納言定家
月影を藤の門にまちそへて猶うらみられぬ人に逢ふ家し
月の歌に　後関白太政大臣道
夜ふけて人はしつまる枕のもとに独さしいる月そさひしき
伏見院萬葉の心をよせて人々に歌よませ

ゆきを経ける時秋のうしなひとゝふらふとくと

前参議家親

なかゝらぬ秋の百夜を重ても詠あかさん月乃影かは

月を

従二位隆博

心こそあくかれやすくぬるにしれ物から行月のこゝろよ

清輔朝臣

待えてもいかにとかせん村雲乃晴まてそ月は照まさりける

正治二年百首哥めしける時

後鳥羽院御哥

うす雲のたゝよふ空の月影はさやけきよりも哀なりけり

題しらず

従二位為子

月影のすみのほり行山のはにかゝる一むらひき雲絶まえ

千五百番哥合に

後久我前太政大臣

吹はらふ萩の葉ならす風乃音に秋ふけて出る山のはの月

月前萩をよめる

権大納言実年

ま萩原よふかき月にみたれてもみたれそふ露は数そふれぬ

月前露を

前大納言実明女

こほれそふ竹の葉ならぬ露分て月宿るよは悲しと知

月をよみ侍ける

藤原為基朝臣

月のゆく晴まの空はみとりにてむら〳〵しろき秋の浮雲

平宗宣朝臣

たえ〳〵の雲まにつたふ影よりそ猶てるともみえし秋の夜の月

題しらす

永福門院

村雲にくれわたるまゝ行月のかけもくもりも色そ涼しき

吹しほる風はしはして雲行の梢にかゝりみる庭の月かな

月前とて

前大納言為兼

月のかけは梢によそめあかす風のよる衰へけしとる松のかけかな

永福門院内侍

松風も空にきこえてふくる夜の梢またかくみ山への月

崇徳院御哥

みる人は袖の露をとふられは月やこゝろに残ぬらん

月の歌あまたよみ侍ける

進子内親王

ふるさとの妹の月にかゝりせはいかにとかさねなかめかせん

百首歌たてまつりし時秋哥

民部卿為定

秋をへて涙おちそふ袖の月かけを晴るとみるよはかな

見月といふ事を　院御製

我心あかつきに更てそもろふよ月

雲をはらふあらしはすさましきのこゝや月のこゝろ哉

前大納言忠良

文保三年百首哥奉り　二品法親王覚助

我袖の露も涙もあまりけり秋のよはの月のことそふ

月をよめる　西行法師

ふかき山にすみける月を見さりせは思ひ出もなき我身ならまし

前大僧正道玄

いまそやまにすみはなれ世中をのかれて月はみるへかりける

山家月を　崇徳院御製

山里は月もやと思ふらん都よりもすみまさりけれ

月哥とて　西行法師

いつくとて哀ならすはなけれともあれたる宿そ月はさや（けき）

庵よりも月の影にはたれかすむ山田はもるとかゝりけるかな

藤原為秀朝臣

雲かゝるたかねの山をいまそまちて月影みるこそ月なかなし

秋の哥に　前中納言重資

影はやきさしはにいでて砥山出る峯のよ九月

月前猿を　皇太后宮大夫俊成

清見かた波をこえくる猿衣やはり海月をこそえん

海きよき月のはしをふくとも　後鳥羽院御製

清見かた梅の煙やきえぬらん月影みつる見なく浦

遍照寺にて人々月見侍りけるに　平忠度朝臣

あはれなり宿とて月はかはらねど昔の影は移そ宿き云

寛治百首に山月を　前大納言為氏

常盤山かはらぬ木々はみえね九月こそ峯の色にいでけれ

風雅和歌集巻第七

秋歌下

九月十三夜月をよみて

左京大夫顕輔

今宵の秋月のひかりはさえわたる光は空にみちよまされ

仁和寺よりおくりしほどに京へ帰参すとて九月十三夜山家月を

院御歌

み山出し秋の嶺の秋ころへて宿りし月や出でし覧

九月十三夜住吉社にてよみ侍りける

前参議俊言

住吉の松の木の間の浪よそにみし海よりも月のさやけさ

秋歌とて

従二位宣子

ちりぬらむふくろうき空晴て梢にかかる村雲の月

山里にすむ月をとてよめる

永福門院内侍

露ふかき袖まくらにもはらはすて寝ぬの枕に月そやとれる

院五十番歌合に秋風月といふことを

儀子内親王

風はれつる草葉の露もしらなくに清き今宵の月

題しらす　前大僧正慈鎮

いる月をくもと嵐はさそふともいつか峯には松の秋風

月の哥とてよめる　太宰大弐重家

なかめやる秋の山せんおもふにも月を吹やるへさね

前大納言経房

月は猶まてたるく秋まの影そすみなる有明の庭

庭前草花を　院御製

風はらふひくれもかつ思ひけるかくて月影さかる有明の庭

百首哥たてまつりし時秋哥　宣光門院新右衛門督

影清き有明の月はさえみて麓は霧にかくる暁の山

嘉暦二年九月十五日内裏の哥合に

暁月雲麓といふことを　萬秋門院

有明の月はのこりて山もとに麓のねはからよふの杉風

秋天象といふことをよみ侍ける　西園寺前内大臣女

月ならぬ星の光もさやけきは秋そふかさやかへてまさらん

元亨元年内裏にて三首の講ありけるに
霧間暁月　前中納言季雄
在明の月はあえて影みえて霧ふかき松の山せ
影しらず　後西園寺入道前太政大臣
村雲のたえまの月の影ながらそらに光の秋ぞなき
大歌陵の女房春秋のあはれをあらそひ
侍りけるに中務春の明ぼのは猶まさると
とやきゝかん棘のくる山さとはこはまたなく
待けるにいひつかはしける
選子内親王家中務

山里に在明の月をながめても松やまとはぬ秋の夜は
秋の御歌の中に
伏見院御歌
山風に河音よるまさる棘の日かすやあらしのなく猿人
永福門院
はてすゞき日影は影よりかへて木葉にうつ庭の松
百首御歌の中に
宣光門院新右衛門督
しづかなる柳の下葉ちりて秋稲なきさの夕風の
百首御歌の中に

順徳院御哥

急雨の雲吹すさふ夕風に一葉つゝちる玉のを柳

題しらす　昭訓門院権大納言

一しきり嵐はすきて桐の葉のしつかにおつる夕暮の庭

秋のうた　太上天皇

ぬれておつる桐の枯葉は音おもりて嵐にかはる村急雨

百首哥奉し時　大納言公重

おちそゝふ桂の下露なとともしら西日の跡の雲に稲明

藤原為秀朝臣

立そむる霧とみえしは村の西風雨にそゝく夕暮の庭

題しらす　徽安門院

しほりつる野分はやみてしのゝめの雲にしたかふ秋の村雲

院一条

ふきみたす野分にあるゝ朝明の色こき雲に雨こほるなり

野分を　前大納言為兼

野分にゆく夕の雲の足はやみしくれに似たる秋の急雨

藤原為秀朝臣

草も木も野分にしほる夕暮はいつくにも雲乱れそり

秋の哥に　院一條

旅のみち松の梢にかゝる雲に松の日よりさきに暮る山

三十首御会の中に秋山を

永福門院

山まきやよそめに雲のたちのほりて猶をちやまの末の下

秋朝のこゝろを

うす雲にわたる月の梢もはれゆく出ぬるあさの杉の下葉

野雲

弾正尹邦省親王

浦の里にゆふ雲にうすきえてふもと里やまのたつ松原

百首の歌奉りし時

権大納言資明

朝日山またこえてさゆるの空に雲にかゝれる松の葉末

題しらす

大江広秀

うら海のはまのみの松にぬれのゝ一むらくりの松にかゝる雲

前大宰大弐俊兼

朝日影さす梢は霧おちて外面の竹にかゝる雲

百首歌奉りし時

左近中将忠季

日影は山にかゝらぬへは暮やらて松原うすき雲かな

文保三年後宇多院に奉りける百首哥の中に

前中納言為相

たくみえぬる山乃霧のまよりちかき松のゝかつ一村

後西園寺入道前太政大臣

入日さす夕日は影消てをそよりくらすの山

秋歌とて　権中納言俊実

霧ふかき爪木のたよりもつきに契りしてくたる山人

嫌山とふゐりと

前大納言為氏

入逢は椿原のたくふえきそめて霧にこもれる山嶺

藤原為基朝臣

立こめてあのへもみえぬ霧の上に梢つゝける松のむら立

河霧をよみ侍ける

前大納言為兼

朝嵐の峯よりおろす大井河うきたる霧もなかれてそ行

前大僧正実超

伏見山ふもとはれゆく雲晴て田面にかゝれる河霧

海辺霧と

前左兵衛督為成

海乃松は一むらはそみえそめてさかりのほかは猶霧

二条院参河内侍

難波かたくもらしさしさへ嫌霧は面見えましきらあまの釣舟

秋歌乃中に

従二位家隆

ゆふのかねこそや空に定ある月の影も夜かはりけり也

月前擣衣といふことを

鎌倉右大臣

秋をまつこゑはきえてさけは長月の有明の月よ夜ふかき之

建武二年内裏千首哥に擣衣

民部卿為定

夜さむなる里の〈しるし〉とそ衣うつおとや嵐のよさむなる

秋夜と

九条左大臣女

今はゝや夢とたに見ぬ鐘の音をきくもさき秋のよな哉

百首哥奉りし時

永福門院内侍

深やまの梢の日影うつりきてやゝまた浅き山の下葉

院より三十首哥めされし時秋木と

新室町院御匣

たちのほる〈あさ〉日に紅葉はいろこくてその梢は霧の一入

秋哥とて

左兵衛督直義

とまるとや名付そむらむ紅葉ちるこの比は時雨も秋と

侍従具定

思ふ哉くにゝみち名付たる月の山の秋風さむくふくらし

山紅葉を

中院入道前内大臣

まだしらぬ時雨にあやなく山藤の梢も紅葉過より
照紅葉といふことを
後宇多院御製
色こくもいかゞ日の照る紅葉錦の行の壁ゆきてみそ
百首ノ中 夕し河
前大納言実明女
紅葉は晴間なちる山の峯にも紅葉ちらしけり杉の一もと
哉しらず
前大僧正道玄
志賀の山こえてみれば神無月時雨ふりにき数は見ちたり
読人不知

秋されば露霜にそめて都の山は名付けなん
今日よそひて紅井河にうつりて紅葉
染のあとといふことをよみ侍ける
権大納言長家
大井川山の紅葉をとりてそら紅のなみぞ立ける
紅葉を
後京極摂政前太政大臣
志れつゝ山乃雲は晴にけり夕日を染る嶺の紅葉
紅葉映日といふことを
内大臣
日影はいま一しほを染てけり時雨の後の嶺の紅葉ゝ

伏見院に三十首歌めされし時山のもみち
をよみ侍ける　前中納言清雅
晴まさる日影にみれハ山もとの梢むらむらもみちしにけり
人々に三十首歌めされけるついてに秋
山を　院御歌
暮かゝる田面の末に山みえていろハふかくも木々の紅葉
林木
通行のめくまる里を紅葉して嵐にほのゝ山のもみちハ
秋望といふことを　今上御歌

夕日さす外面の杉のむら紅葉にほひさひしき秋そ暮ぬる
建長三年吹田に御幸ありて人々に
十首歌よませ給けるついてに
後嵯峨院御歌
もみちはを思ひそ志らるゝめくる紅の紅葉ちる比
二品法親王覚助長月の末つかた嵐山に庵
に侍りてもみちの枝ををりて奉り
侍けるにこの一枝のこりゆかしくこそとて
たまはせける　伏見院御歌
冬ふかき山のもみちの一枝にをりしる人の情をそみる

御返し　　　　　二品法親王覚助
色そへてみるへき花のためとてそ我山里の名をもおける
正治二年百首歌の中に
式子内親王
とけて寝ぬ袖さへ色に出ねとや露吹結ふ峯のこからし
なか月の比もとめ山のもみちを見て
能宣朝臣
下紅葉多くれなゐの松か山こしくれのいろはまさりけり
九月九日を
花山院御製
萬代をつむとも尽し菊の花長月のけふあらむかきりは
寛治百首歌よ重陽宴を
山階入道前左大臣
長月の菊はさかりこそのへよ花めくりても秋はしめし
冷泉左大臣
九重に千世をかさねて見すへきはけふそすくる白菊の花
藤原隆祐朝臣
めくりあふ月日もおなし九重にかさねてゆふちよる白菊
位のはしめ三とせの禊せられけるつゐに
庭菊を　　　　　後醍醐院御製
百敷やちよの九重の菊の花の九にはまにおもてうきなん

題しらす　源光行

よそふる光は菊とさきぬれと月まては菊のつゆのみなれ

堀河院百首の歌の中に菊を　権中納言師時

菊のかへ人とやとふと思ふ我宿乃籬に匂ふ白菊の花

屏風にかきたるかめの菊の花うつろふところを　貫之

かく霜乃をぬゆるせる菊の花もまさりけるのふる色は

秋の歌に　前中納言定家

鴫乃なく田の原の末は秋ふけて吹やまよふ嵐の松か枝

百首歌たてまつりし時秋の歌　進子内親王

見るまゝに雲に消ゆく秋の日の時雨にむせふ深雲の色

霜菊欲枯といふことを　前中納言定房

初霜に枯行草の葉秋はくれぬと雪そ残さき

崇徳院よりめされける百首歌に　前参議教長

かれ生しまゝにとなるは花盛りも秋とえやちとめぬ

旅の御歌の中に　後鳥羽院御歌

虫ふ(ち)きさ株の葉末に吹かへて又吹ゆく山おろしの風

院五十番歌合に秋視雑といふことを

権大納言公宗女

秋の色は空にのこれる雲のはしたくれぬる人よ灯の影

暮秋雨を

前大僧正覚円

庭の面に萩の枯葉はちり敷て音すさまじき暮の雨

院に二十首歌めされし時秋木を

西園寺前内大臣女

梢の葉にしほれてをつる桐の葉はやどすはしりそさそひけり

影しらず

永福門院

よわる桐の葉は庭におちて嵐にまよふ村雨の音

秋のころよみ侍ける

慶政上人

年ふるみ山乃奥の秋風にね覚えぬ暁そなき

建保(仁)二年百首御歌に

後鳥羽院御歌

何となく庭の蓬も下おれて乃ひゆく虫の声そふけゆく

暮秋虫を

伏見院御歌

夕日さす枯野のあさちしほれてもなれとよわき虫の声

後伏見院左京大夫

しら露のおきふす庭の葉よりもまたてふ我そいろ迄

正治百首哥に　式子内親王

志もさむき浅茅か付庭乃面に人めかるへき秋ならは

百首哥奉し時

侍従隆祐

いとゝやとねはらはぬ袖露乃さむしき寝覚に山風そ吹

秋霜といふ事をよませ給ける

後鳥羽院御哥

夕露のふるえ乃萩乃下葉より枯ゆく秋の色そみえける

浅茅秋露と　従二位為子

長月やよはむの比の在明乃光に浅茅生乃露

秋乃哥に　前大納言為世

風さゆるまくすか原の秋暮てくさね枯ゆく日数へにけり

九月盡をよめる

登蓮法師

年毎にわかるゝものをおしけさは秋のみならん秋はあれと

前中納言為相

山とこえとをさかりてもとまらぬいそくの秋乃別路

宝治百首哥に九月盡を

常盤井入道前太政大臣

引妹のゆかりとそふにかへるとも又いつ見もうらし
おもひしを　後伏見院御哥
月をみし風をかよはせぬ窓のうちに小妹を送りて
むかふひとりし火